

中部地方におけるオオクチバスの mtDNA ハプロタイプの分布

土田陽介・佐藤千夏・*向井貴彦（岐阜大学地域科学部，*発表者）

日本国内のオオクチバスは，1) 1925年に赤星鉄馬氏が持ち込んだ種苗，2) 1972年に持ち込まれたミネソタ産の種苗，3) 1980年代後半に持ち込まれたフロリダ半島産亜種，の少なくとも3種類の種苗導入が知られており，mtDNAの調節領域の塩基配列によってそれらに対応すると考えられる3群が識別されている（高村，2005）．そこで，中部地方の7県35地点で採集したオオクチバス281個体のmtDNA調節領域の塩基配列を決定し，当該地域に分布するオオクチバスの由来と分布拡大パターンについて推測した．

調査の結果，濃尾平野周辺のほとんどの場所では1925年の導入に由来すると思われる塩基配列（ハプロタイプh）が分布していた．中部地方には1970年代の第一次バス釣りブームの時すでに有名釣り場となっていた場所もあるため，バス釣りブームの初期段階で持ち込まれたものが拡散したものと考えられる．しかし，ミネソタ系統の塩基配列（ハプロタイプc）が局所的に分布する地域もあったため，それらの場所では由来の異なる系統が追加放流された可能性がある．また，これまで近畿地方以外で確認されていなかったフロリダ半島産亜種のハプロタイプが野尻湖と揖斐川河口で発見された．揖斐川で発見されたフロリダ半島産亜種のmtDNAは琵琶湖で見つかっていないものであり，ミネソタ系統のハプロタイプも琵琶湖には分布していないことから，少なくともこれらのオオクチバスは，琵琶湖産アユの種苗放流に混入したものではなく，意図的に放流されたものであると考えられる．

水系内でのハプロタイプ分布を見るかぎりでは，河口域で複数のハプロタイプが見られたのに対して，支流やため池では特定のハプロタイプのみが分布していた．このことは，増水時などに各支流からオオクチバスが流下することで河口域に多様なハプロタイプが出現するのに対して，本流から支流へと遡上することがないためと考えられた．このことは，水系内の支流・ため池のオオクチバスを順次駆除していくことで長良川などの大規模水系からのオオクチバスの排除が可能であることを示唆している．